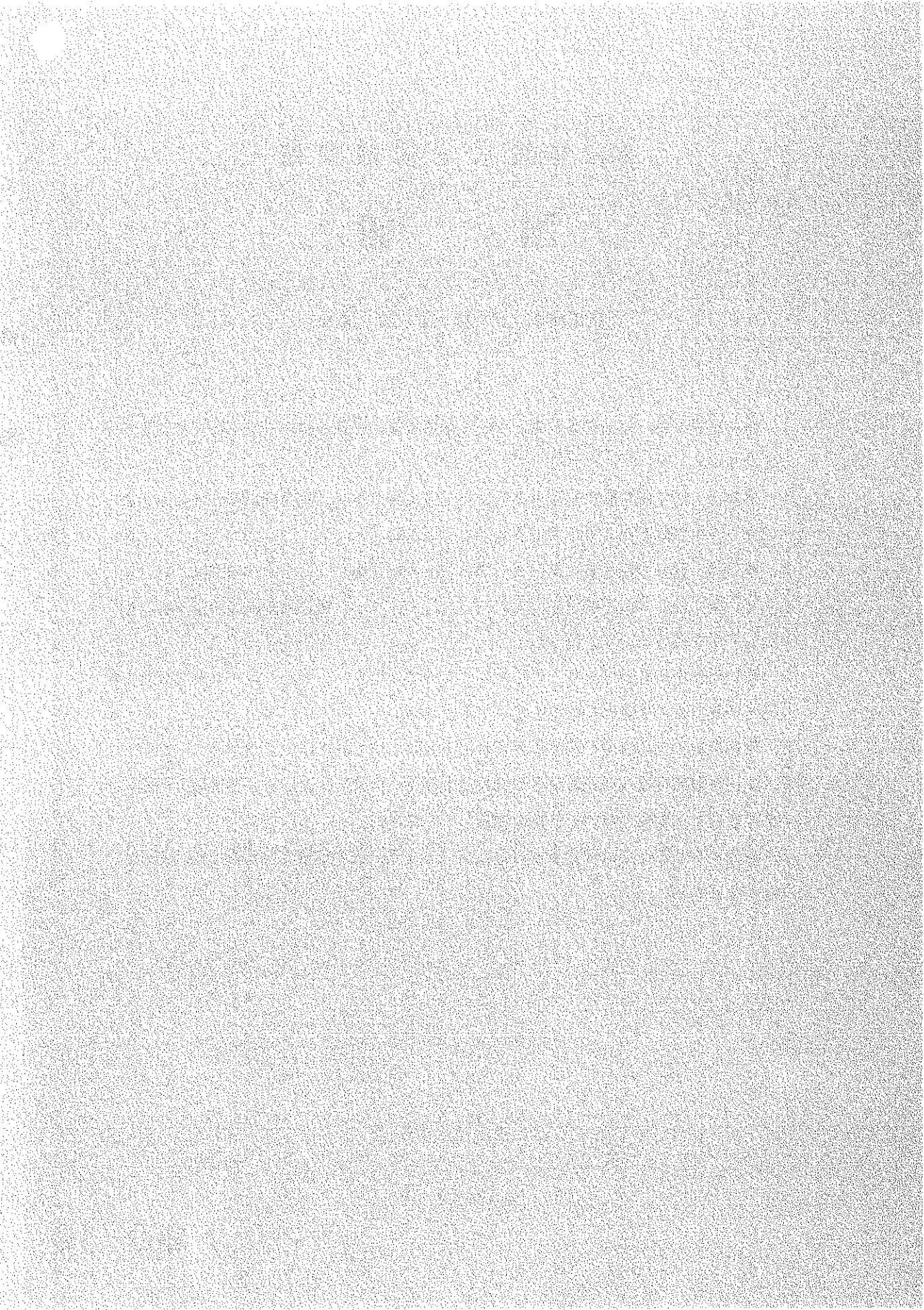


2018 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
7. 満点が100点となる配点表示になっていますが、文学部国文学専攻の満点は150点となります。



— 次の文章は一九七九年に刊行された『シユルレアリスムの発見』の一節である。これを読んで、後の間に答えなさい。(50点)

神光ありと言ひ給ひければ光ありき

〔旧約聖書 創世記〕

神が創造した最初の物質は光であった。そしてこの光は太陽や月や星より、いち早く造られたものだ。「地は定形なく曠空しくて黒暗淵の面にあり。」地とはいまだ天と地とがわかれざる原始の状態をさしており、そうした暗黒の世界をまず光が走った。しかもこの光が太陽や月や星のそれではなく、光そのものであったのは、ほくにとつてかなりシゲキ的だ。⁽¹⁾発光体を有することなくして、光それ自身が本質的な光として存在することの矛盾。ほくの偏見によれば、この矛盾のうちに光そのものになわされている独自性が保証されている。つまりこの光とは、まさに「文明」の内実であったはずだ。

ほくらにとつて発見とは、つねにこのようにして光をともなっている。ほくらの未知なる闇は発見という光によって、ひとつまたひとつと文明の方向へとせりあげられる。闇のうちでかすかな予見とともに眠っていたものは立ちあがらされ、発見の関所を通過することによって、ある意味を負わされる。たとえば明和八(一七七一)年三月四日、千住骨ヶ原の腑分けに立ち会った杉田玄白、中川淳庵、前野良沢らが、切り開かれていく罪人の臟腑のうちに目撃したものは、切りきざまれた肉でも、したたる血でもなかったはずだ。⁽²⁾彼らが見たもの、それはまさしく光そのものであった、とほくには思われる。この光は、『ターヘル・アナトミア』という鏡の検証によって、光文明の正当性を附与される。そしてこれによって、ほくらの肉体はすでに憑かれたる、物の怪の栖でありつづけることは不可能となる。玄白らが臟腑のうちに、光を目撃した瞬間から、ほくらの肉体はすでに腐れゆく過程で、しばらくとどまっている物質でしかなかった。それはかぎりなく分析されることによって内部のあちこちの裏にある闇を、光によって吸収され、その分だけ衛生的になる。

このようにしてみれば発見とは、不滅なるものを滅亡へと導いていくこととほぼドウギな⁽³⁾のだ。ほくらはたとえば癌をひどく怖れる。そしてそれが医学的に征服される日を待ちのぞんでいる。しかしこれを別の視点から見れば、ほくらは、物質としての

みずからの肉体への検証としてのみ発見をとらえていることが了解されよう。ぼくらはこのようにして発見なるものを讃歌しつゝ発見によつて侵蝕しんじよくされる、内部の未知なる闇をつぎつぎに手放してはいはしまいか——。私見によれば、いまぼくらはむしろ、「反発見」の視座をどのようにして確保するかという、問いにこそさらされねばならない。反発見の視座は闇のうちに降りていつて、やがて淵のような沈黙につきあたるだろう。沈黙がぼくらの生にとつて、どれほどの重さで関わってきたか。沈黙はことばをかぎりなく生んでいる。

骨ヶ原の腑分けによつて、オランダのカイボウ書『ターヘル・アナトミア』⁽⁴⁾の科学性を立証した杉田玄白らはこの原書の翻訳に着手する。辞書さえない時代における、この翻訳は、まさに手さぐりにことばを探しあてる苦しみの連続であつたわけだが、ぼくは彼らの仕事のなかに、ことばが発見に参与しているある一面をみる。つまり彼らにとつて原語はひとつの記号であるわけだが、それが胃なら胃と訳されることによつて、胃なることばは実在性を同時に有する。ことばは名ざすことによつて、発見に確たる意味を添える。ことばはこの日常性のうちで、発見を認知するとともに、未知なるものをかぎりなく意味の明るみにひきずりだしてくる。ことばはこのかぎり、未明の衰弱と等価である。ことばが散乱すればするほど、すべては意味づけられ、それによつてぼくらの内なる自由は束縛される。このようにことばの日常性は、発見Ⅱ文明を不特定多数の地点に飛び火させ、その見返りとして、ぼくらの内なる自由の周囲に厚い壁をきずいている。ぼくらが本質的にことばに関わるとは、まさにこのよう(5)なことばたちを、日常性の外側に連れだす試みへの意志なのである。

ところでぼくが小学校の四年生くらいのころだつた。ぼくら悪童たちは、とうぜん芽ばえてくるエロチシズムへの疑問をもてあましていた。ぼくらの周囲はただ食物に飢えているだけであり、ぼくらの疑問をみたしてくる性知識に関する本などまづたくなかつた。ぼくらの村は、すつぽり軍用飛行場にかかつた。移転させられたぼくらの家の物置には、食うための役に立たぬ本などは、キユウキヨ⁽⁶⁾から運び込まれていなかつたのだ。ぼくらはついにその好奇心をみたすべを辞書に求めた。ぼくらは、古びた国語辞典を幾分冊かに引きちぎつて、各自分担した。ぼくらはうす暗い光のなかで、辞書の説明の部分に当たつては、それらしいことばを、なめるように探しだしていった。⁽⁷⁾ぼくらのこのリスト作りは一見玄白らの翻訳のためのことば探しに似ている。

しかしそれはまさに似て非なるものなのだ。ぼくらのリストにあがった、たとえば子宮なることばは、その説明の部分によってなお意味の混乱をまねいた。ぼくらはそれを見たこともなければ正確に女性のどの位置にあるかも見当がつかなかった。ぼくらは結ばれてこない子宮のイメージをさまざまに思いえがいた。説明には西洋梨とあるがぼくらは西洋梨すら知らなかった。ぼくらのふくれあがった想像のなかでは、ただ普通の梨がさかさに熟れており、それが重たさと、深いのでみえないような闇をのみたたえていた。眼は未開の状態におかれている、といったのはアンドレ・ブルトンだが、ぼくらにとつて、まさに「ことばは未開の状態におかれていた」のだ。そしてこれはブルトンのことばとほぼドウギである。ことばはこの未開の状態におかれているときほど、ぼくらの想像力を日常性の外側に連れだしてくれる。そして連れだされた想像力は、おそらくあの「定形なく噴空しき」地へと向かい、「黒暗」にみたされた淵のまわりをかぎりなくめぐっているはずだ。ことばが発見と関わりなく逃避して沈黙へ

れはこのようにしてきわめて逆説的である。発見の裏側に残されている闇の部分へ、ことばがかぎりなく逃避していつて沈黙へと沈んでいくとき、はじめてことばは生きはじめなのだ。このときすでにことばは日常を超えており、ことばにおける反発見への視座、または意志は、おのずから反日常へのぼくらの生の姿勢の反映でもあるはずだ。

さてぼくは近ごろ、発見Ⅱ文明の時代におけることばの風化に対置させることばの本来的なちからとして、パロディー⁽⁶⁾についてしきりに考えている。

野原をさまよう神々のために

まずたのむ右や

左の椎の木立のダンナへ

椎の実の渋さは脳髓を

つき通すのだが

また「シユユ」の実は

あまりにもあますぎる

(西脇順三郎『壊歌』)

これはもちろん芭蕉の「先頼む椎の木もあり夏木立」をもじったものである。ここでは西脇順三郎によって借りだされた芭蕉の句はまったく無化されている。したたかに句の意味をそぎ落すことによって、新しい無意味をまったく不意に現出させているのだ。このとき西脇順三郎のことはたちは、むしろあの闇を通りぬけて透明な永遠となり合っているだろう。こうしたことばに、ぼくはこの (9) に対するさりげない、そしてきつさき鋭いイロニーを見いださざるをえない。

この最大な地球の時間

に耳かたむけることだ

脳南下症は

永遠へ旅立つ美しい旅人だ

(西脇順三郎『賛』)

脳軟化症が脳南下症ともじられているのだが、ぼくはこの脳南下症ということばにぶち当たったとき、ぞくつとした気持ちにおそわれた。ぼくらの頭部から脳がぬけだして、南下している。これほどのグロテスクはあるまい。さりげないパロディの彼方に底知れない退廃が隠されている。そしてこのパロディはあくまでも意味としての深刻さとタンラク(10)していない。このようにして西脇順三郎のことは、パロディイイとかたかたかでかぎりなく原典を遠ざかり、そしてそれと同距離だけ現実を超えている。そういう意味でぼくは西脇順三郎の最近の詩のことばに、自由をはらむことばのひとつの典型をみる思いがするのだ。

(鶴岡善久『シュルレアリスムの発見』による)

注 アンドレ・ブルトン……フランスのシュルレアリスムの詩人（一八九六―一九六六）。

西脇順三郎……詩人、英文学者（一八九四―一九八二）。シュルレアリスムを日本に紹介した。

先頼む権の木もあり夏木立……松尾芭蕉の『幻住庵記』に収められた発句。

〔問一〕 傍線(1)(3)(4)(6)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(2)「彼らが見たもの、それはまさしく光そのものであった」とあるが、筆者によれば彼らが腑分けに立ち会ったことよつてどのような事態が生じたのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 肉体という物の怪を宿していたものが、その正体が白日の下にさらされたことでありふれた日常的な事物へと変容した。

B 肉体という穢れた存在として考えられていたものが、その根本原因が分析されたことで衛生的なものへと浄化された。

C 肉体という有機的生命体として捉えられていたものが、その装置が顕わにされたことで無機的物質の集積に姿を変えた。

D 肉体という不可解で神秘的な存在だったものが、その機構が暴かれたことで知識として世界に整然と位置づけられた。

E 肉体という観念的存在にすぎなかったものが、その内部構造が実地に調査解明されたことで実体的存在へと変化した。

〔問三〕 傍線(5)「このようなことばたち」とあるが、それはどのような働きをするのか。その説明としてもっとも適当なものを

左の中から選び、符号で答えなさい。

A それまで曖昧だったものごとくに意味を付与し、観念的存在に昇華させることによつて世界を切り分けていくが、その分人間の自己表現の範囲を狭めていく。

B それまで知られていなかったものごとくに名前を与え、確たる実在たらしめることによつて世界を秩序立てていくが、その分人間の思考の幅を限定させる。

C それまで発見されていなかったものごとくに実体性をもたらし、正当性を付与することによつて世界を拡大させていくが、その分人間の想像力を貧弱にさせる。

D それまで不明確だったものごとを概念化し、思考の対象とすることによつて世界を実在化していくが、その分人間の関係性を窮屈にし精神的自由を奪う。

E それまで存在していなかったものごとくに明確な定義を与え、認識の対象とすることによつて世界を統御していくが、その分人間の思考力に縛りをかける。

〔問四〕 傍線(7)「ぼくらのこのリスト作り」とあるが、それは結果としてどのようなことをもたらしたのか。その説明として

もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ことばの意味が不明瞭で具体的なイメージを持たなかったことで、ことばでは表現不可能なものの存在に気がついた。

B ことばが対応しない事物を想像し思考が日常の外へ逸脱したことで、新しいことばを創造していく自由を手に入れた。

C ことばと現実の事物との対応が不明なままで想像力をめぐらせたことで、意味が確定しない混沌こんとんの中に解放された。

D ことばにより事物に名前をつけ新たな意味を付与していくことで、それまで未知だった世界が日常に位置づけられた。

E ことばを概念的にしか理解しなかったことで、想像力が日常の外部へ拡大し生き生きした未開の状態に帰っていった。

〔問五〕 傍線(8)「パロディー」とあるが、その機能の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 詩句の付加や語の二重的意味の提示など元の作品の内容を拡充することによって、ことばが持っている本来的な力を発生させる。

B 語の意味を限定し典拠となった作品世界を無化することによって、かえって手垢てあかのついたことばを刷新して読者の想像力を増幅する。

C もとの意味内容を巧みにずらし別のイメージを作り出すことによって、ことばが本来もっている正しい意味を読者に気づかせる。

D 文章を構成していることばの構造自体を解体し意味を剝奪することによって、読者の日常的な感性をゆさぶり原初的な感性を回復する。

E 原典のことばの意味をとりこみつつ意味を逸脱させ諧謔かいぎやくを生み出すことによって、すきまなく意味づけられた日常生活に風穴をあける。

〔問六〕 空欄(9)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 未開の状態 B 現代の神話 C 意味の時代 D 文明の衰弱 E 言語の退廃

〔問七〕 この文章の趣旨に合致するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 本文で「光」になぞらえられている「発見」という営為は、対象が科学的に解明されていく契機となる一方で、未開の事象が内包している豊かな神秘性を奪ってしまうという相反する性格を含んでいる。

B 杉田玄白らの『ターヘル・アナトミア』の翻訳においても、ことばを探し当てること自体においては、筆者の「リスト作り」の体験でことばを発見し未知の世界を意味づけていたのと同様の作業を行っている。

C ことばによって世界が規格化され思考の自由が奪われている現代では、未知なるものに意味を付与することを止め、想像力を日常の外部へと拡げてことばの根源的再生を図っていく能動的態度が必要である。

D 現代では日常生活を営むにあたり、未知の世界を意味づける新しいことばが絶え間なく生み出され続けているが、とりわけその中でもパロディを通して言葉の新鮮味を更新していく詩人は重要な存在である。

E 芭蕉の句が引用された西脇順三郎の詩は理解困難だが、読者は様々な解釈をめぐることで意味に束縛された日常を脱し、本文で「本質的な光」に例えられた原初の世界に踏み込む愉楽を味わうことになる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

ヤンキー文化には「本質」や「起源」と呼べるものがない。その本質なるものがありうるとしても、それは中心ではなく周縁に、内容ではなく形式に、深層ではなく表層にしか宿り得ないからだ。

「隠喩」が本質的な比喩表現なら、「換喩」は隣接的な比喩表現である。例えば「リーゼント」や「特攻服」で「ヤンキー」を表現することは換喩表現である。それは「だが断る」でジョジョを表したり、「三倍」でシャアを表したりするようなものだ。すでに勘の良い人はお気づきではないだろうか。たしかに「三倍」といえばシャアなのだが、それはシャアの本質とは何ら関係がない。ところがである。リーゼントや特攻服は、ヤンキーをあくまで換喩的に示すだけのはずなのに、あたかもそこにヤンキーの本質までが表現されてしまっている。

ヤンキーに本質を求めることが難しいのは、その本質が常に全面的に表出されてしまっているからなのである。「ホンネでぶつかる」ことを美德とする彼らは、おのれの本質を隠蔽する気などみじんもない。むしろ彼らの内面は、その髪型、そのファッションを選択した後に、事後的に発生するのである。

僕はこうしたヤンキー文化の特性が、ある意味で日本文化の「粹」⁽¹⁾であると考えている。日本文化におけるリアリズムにおいて、隠喩よりも換喩の作用が支配的であると考えるなら、それが最も凝縮されたものがヤンキー文化なのではないだろうか。

ちよつとヤンキーからは離れるが、日本文化における「換喩」作用の例として、「ケガレ」について考えてみよう。「ケガレ」は「キヨメ」とのセットにおいて、日本文化に特有の発想とされている。

良く知られているように、「ケガレ」思想は古事記の「イザナミとイザナギの神話」に由来する。国生みの後、火の神を生んで死んだイザナミを追って、イザナギが黄泉の国に行く。そのときにイザナギは妻との約束を破り、蛆の湧いた彼女の体を見ってしまう。怒って追ってくるイザナミを、イザナギは何とか振り切り、川の水で体を清めて難を逃れる。この話のポイントは「穢れ」が「見ること」で感染することと、「穢れ」を水で洗い落とし、清めることができるという点である。「ケガレ」と「キヨ

メ」の発想はここから出てくる。

こうしたことから、僕は「ケガレ」には「換喩的感染」⁽²⁾という作用があると考えている。「換喩的感染」とは、そのものの本質とは無関係にそのものに接触をする、そのものに隣り合ってしまう、それだけの理由でそこで何らかの本質が移動したかのようを感じてしまうという感覚のことだ。別の言い方をすれば、ある影響関係において、そのものの本質以上に隣り合っていることゝとか、似ていることゝなどの方が大きな意味をもつ場合、そこでは「換喩的感染」が起こっている。

このように考えていくと、一つの結論に辿りつく。おそらく「ケガレ」そのものには、いかなる本質も存在しないのだ。「ケガレ」とは、隣り合うことや接触することにおいて連鎖的にコピーが作られていって、そのコピーがそのつど本体にとってかわってしまうような、それ自体は空虚な感覚を指しているのではないか。

換喩と言えばイザナギの禊ぎのシーンにはほかにも興味深い点がある。穢れから生まれた神は名前に必ず「禍」という文字が入っている。その「禍」を直そうとして生まれた神は「直」という字が名前に入っている。水の底で身を清めたときに生まれた神には、「底」という字が必ず入る。まるでダジャレのように神々が生成していく。つまりここでも、本質とはいっさい関係なしに、イザナギの身振りをそれぞれ換喩的に変換するかのように、神々が次々と生まれていくのだ。イザナギが主体的に生み出しているのではなく、彼の一連の行為から、勝手に神が生成してしまう。その意味では、古事記の神々の多くが、換喩的な生成物ともいえるのかもしれない。

ところで、古事記の神々の中でもっともヤンキー的な存在は、言うまでもなくスサノヲであろう。スサノヲはイザナギとイザナミの息子なのだが、亡き母を慕って泣きわめき、イザナギから追放されて高天原へと向かう。姉のアマテラスの前で身の潔白を証明したはいいが、ひどい乱暴狼藉をはたらいてアマテラスがひきこもってしまい、高天原も追放される。しかし出雲に降りてからはヤマタノオロチを退治するなど英雄的な活躍をする。

不良だつたり英雄だつたりと、キャラがいまひとつ定まらないという話もあるが、もしスサノヲを「日本最古のヤンキー」と考えるなら、話は簡単だ。ヤンキーが基本的にマザコンであることはすでに何度か述べてきた。乱暴狼藉は思春期における

ちよつとしたやんちゃぶりのエピソードとして理解できよう。追放を喫ぎと考えるなら、改心した元ヤンキーがいかに英雄的に振る舞うかについては、白洲次郎からヤンキー先生に至るまで、いくらでも前例がある。⁽³⁾たとえ悪事をはたらいて「ケガレ」を背負ったとしても、それは「キヨメ」という換喩的な操作でリセット（「褻ぎ」）することができる。そればかりか、むしろ「褻ぎ」そのものが、「ケガレ」の価値をプラスに変換する力すら持っているのではないか。女性はともかく男性については「元ヤンキー」「昔悪かった」「やんちゃだった過去がある」などの経歴は必ずしもマイナスにならない。そこには、換喩的な価値転換作用が働いている、と考えられるのだ。

ここまでヤンキーと古事記の關係にふれてきた以上、丸山眞男の言葉にも耳を傾けないわけにはいかない。それでは、丸山は何を言ったか。彼は古事記を徹底的に読み込んで、「つぎつぎになりゆくいきほひ」の歴史的オブティミズムが日本文化の古層にある、と喝破したのだ（『歴史意識の「古層」』『丸山眞男集 第十卷』）。

なんのこっちゃ、と思つただろうか。これは僕なりに、翻訳^レするところなる。要するに「氣合とアゲアゲのノリさえあれば、まあなんとかなるべ」というような話だ。これが日本文化のいちばん深い部分でずっと受け継がれてきているということ。つまり丸山というわが国でも屈指の政治思想家が、まだヤンキーという言葉もなかった戦後間もない時期に、日本文化とヤンキー文化の深い連関をみぬいていた、ということになる。

ここで興味深いのは、「つぎ」も「なる」も「いきほひ」も、僕がずっと述べてきた換喩性の問題に近づけて考えることができる、ということだ。

例えば、古事記にはしばしば「次」という言葉が出て来る。丸山はこれを、「世界を、時間を追つての連続的展開というタームで語る発想の根強さ」や「血統の連続的な増殖過程」といったものの表現であると考える。たとえば「永遠」という概念がある。これは基本的には欧米からの輸入概念だ。「永遠」は、過去—現在—未来という時間の区分を超えた概念でもある。いわば、僕たちの持っている日常的な時間の概念の外側にあるのが「永遠」という概念だ。だからこそ、それは「死」の隠喩にもなりうる。

しかし古事記の中に流れる時間は、そうではない。古事記の時間は「いまここ」がつぎつぎとつながっていくような時間である。この「いま↓いま↓いま↓いま……」という連続には「終わり」というものがない。そこには「永遠」という概念のかわりに、どこまでも終わることなくつながっていく「いま」のイメージがあるのだ。

古事記に「つぎ」という言葉が良く出て来るのは、生成がどこまでも次の生成につながっていくイメージであり、これは世界と時間が(4)状態につながっていく「換喩的時間」とも言える。

それでは「なる」についてはどうだろうか。これは他動詞である「うむ」、「つくる」に対立する自動詞だ。古事記の神々は別の神から生まれるが、それは神が自らの意志で作ったり産んだりするとは限らない。「イザナミがスサノヲを産む」「イザナミがスサノヲをつくる」といったような、主語と述語の関係が曖昧なのだ。むしろイザナギが禊ぎをしたら、スサノヲが勝手に「なる」ようなかたちで生まれてしまった。アマテラスもツクヨミもそんなふうにして自動的に生まれている。

だから丸山は次のように言う。「日本神話では『なる』発想の磁力が強く、『うむ』を『なる』の方向にひきこむ傾向がある。それだけ『つくる』論理におけるような、主体への問いと目的意識性とは鮮烈に現れないわけである」(前掲書)

さきほど神々がタジャレのように、つまり換喩的に生まれてくることについてはふれたけれど、これこそが「なる」の換喩性とも言えるだろう。さらに言えば「なる」は次の「いきほひ」とあいまって、ヤンキー美意識の過剰さをもたらすことになる。

さて「いきほひ」である。これは、先ほど指摘した神話的空虚そのものだ。

「葦牙の萌え騰る」生命のエネルギーから「大地・泥・砂・男女身体の具体的部分が、つぎつぎとなりゆく」という発想。丸山の表現を借りるなら、そこには世界を作り出した「神」も、起源も存在しない。あるのは「生成のエネルギー」の連続、それだけだ。

そのエネルギーそのものをそのつどの出発点として、世界が「いくたびも噴射され、一方向的に無限進行してゆく」というイメージ。そう、「いきほひ」は意味でも象徴でもなく、空虚で純粋な推進エネルギーそのものなのだ。

(斎藤環『世界が土曜の夜の夢なら』による)

注 ジョジョ……荒木飛呂彦によるマンガ作品の登場人物。 シャア……テレビアニメ『機動戦士ガンダム』の登場人物。

白洲次郎……「もつとも洗練されたヤンキーキャラ」と本書が形容する木村拓哉がベタ褒めする昭和期の実業家。

ヤンキー先生……義家弘介、元ヤンキーで高校教師から国会議員になった。

〔問一〕 傍線(1)「日本文化の「粹」の意味としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本文化を支えるフレーム
- B 日本文化の選りすぐりの形
- C 日本文化の颯爽とした気風
- D 日本文化を内破させる力動
- E 日本文化がやせ衰えた形骸

〔問二〕 傍線(2)「換喩的感染」とあるが、「換喩的感染」が発生した例としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 満員電車で強烈な香水をつけた人ともみくちやにされたので、その日は服に匂いが移って不快だった。
- B 風邪を引いた恋人を看病のために訪れたら、翌日は自分が風邪を引き、なおかつ恋人は看病に来なかった。
- C 犬の糞を踏んでしまった友だちが近寄ってきたので、えんがちよというまじないで接近を阻もうとした。
- D 吸血鬼に咬まれて変異した妹が襲ってきたので、心を鬼にして胸に杭を打ち込んで土に還してあげた。
- E 失恋して落ち込んでいたときにある宗教の集いに誘われ、俗世を捨てる教えに共感して入信を決めた。

〔問三〕 傍線(3)「たとえ悪事をはたらいて「ケガレ」を背負ったとしても、それは「キヨメ」という換喩的な操作でリセット(「禊ぎ」)することができる」とあるが、「キヨメ」によるリセットが可能である理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本人は恨みをため込まずに現在の充実を選ぶ民族なので、ケガレも簡単に水に流してなかったことにできるから。
- B 「やんちゃ」という言葉が示すようにヤンキーの狼藉は幼児期の一過性のケガレなので、改心すれば許されるから。
- C ヤンキーの暴力は筋を通した結果なので、換喩的な暴力としてのけじめによって相殺されてキヨメが成り立つから。
- D ヤンキーが体当たりの行動に走るのには根が純粹だからであり、暴力性の裏側には傷つきやすい魂が隠れているから。
- E ヤンキーには本質がなく、その悪事は外面の空虚なケガレでしかないので、空虚なキヨメによって置換できるから。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 隣り合った
- B 支え合った
- C 混じり合った
- D 反映し合った
- E 触発し合った

〔問五〕 次の文ア～ウのうち、丸山眞男が古事記から読み取った日本文化の特徴がヤンキー文化に反映している事例としてふさわしいものに対してはA、ふさわしくないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア ヤンキーファッションは、目立つために既存の様式を逸脱し、それが新たな様式として定着すると、そこからさらに新たな逸脱が生じるといふ形で増進的に発展する。

イ ヤンキーは気合いと根性さえあればなんとかなると考え、将来の展望より現在の充実を優先するので、総じて早婚で子だくさんになり子孫を増殖しがちである。

ウ ヤンキーにとって最も重要なものは仲間との絆きずなであり、集団で爆走を繰り返すのは、まっすぐに進行するエネルギーを共有することで絆を育むことができるからである。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

三条の右の大臣、中将にいますかり (1) 時、祭りの使にさされていでたちたまひ (2)。通ひたまひける女の、絶

えてひさしくなりにけるに、「かかることにてなむいでたつ。扇もたるべかりけるを、さわがしうてなむ忘れに (4)。ひ
とつたまへ」といひやりたまへりける。よしある女なりければ、よくておこせてむと思ひたまひけるに、色などいといと清らなる
扇の、香などいとかうばしくておこせたる。ひき返したる裏のはしの方に書きたりける。

⁽⁷⁾ ゆゆしとて思むとも今 ⁽⁸⁾ はかひもあらじ憂きをばこれに思ひ寄せてむ

とあるを見て、いとあはれとおぼして、返し、

⁽⁹⁾ ゆゆしとて思みけるものをわがためになしといはぬはたがづらきなり

(『大和物語』による)

注 三条の右の大臣……藤原定方 祭りの使……陰曆四月に行われる賀茂神社の祭りに宮中からつかわされる勅使

〔問一〕 空欄(1)(2)(4)には、助動詞「けり」が入る。それぞれふさわしい形に活用させたものを解答欄に記入しなさい。

〔問二〕 傍線(3)(5)(6)の解釈として、もっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(3) 「さわがしうて」

- | | |
|---|------------|
| A | 準備する時間がなくて |
| B | 人があまりにも多くて |
| C | いろいろな忙しくて |
| D | 周りがうるさくて |

(5) 「よしある女」

- | | |
|---|--------------|
| A | 前世からの因縁のある女性 |
| B | 身分の高い女性 |
| C | 優雅な女性 |
| D | 風流のたしなみのある女性 |

(6) 「よくておこせてむ」

- | | |
|---|----------------------|
| A | うまくいけば届けてくれるかもしれない |
| B | すばらしいものをきつと届けてくれるだろう |
| C | 適当なものを届けてくれるだろう |
| D | 今幸せだったら届けてくれるだろう |

〔問三〕 傍線(7)に「ゆゆしとて忌む」とあるが、男女間の扇のやり取りがなぜ「忌む」べきことなのか、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 扇は涼しい秋になると顧みられなくなるものであるため。

B 開いたり閉じたりできる扇は移り気な人の象徴であるため。

C 末広がり形状をもつ扇は縁起がよく結婚の申し込みの意味をもつため。

D 扇に張られた紙は破れやすく死を連想させるものであるため。

〔問四〕 傍線(8)に「今はかひもあらじ」とあるが、女がこう思った理由を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。(句読点を含む)

〔問五〕 男の返歌の傍線(9)の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 私にもう未練はないとおっしゃったのは、やはりあなたの方が薄情なのだと思います。

B 私のために扇はないと断つてくださったのは、誰も薄情だといわれなかったと思います。

C 私のために扇はないと断つてくださらなかったことで、二人にとってつらいことになりました。

D 私のために扇はないと断つてくださらないのは、むしろあなたの方が薄情なのだと思います。

E 私にもう未練はないとおっしゃらないのは、あなたにとってつらいことだと思いません。

〔問六〕 次のア、カのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 女から届いた扇に書かれていた歌のすばらしさに男は大変心を打たれた。

イ 女から届いた扇に書かれていた恨み言で、男は女への気持ち冷めてしまった。

ウ この話は女性をないがしろにするとしつぺ返しを受けることがあるという教訓を伝えている。

エ この話は男女間で扇を取り交わすことが「忌む」べきことになった由来について述べている。

オ 男の返歌は、扇を取り交わすことが「忌む」べきことだと忘れていたという前提で詠まれている。

カ 男女間で扇を取り交わすことが「忌む」べきことだと実は二人とも知っていた。

